

『遊行期への随想』

羽尻 嵩

会報の先月号で、菊川年明さんが卒寿を迎えられたとの記事がありました。今後も会の活動を共にやれることをうれしく思います。この会の会員も、長寿の方が増えてきていますが、かく言う私も傘寿が近くなり、これからの生き方・あり方をいろいろ思うようになりました。そんな折、本屋で作家の五木寛之さんの「人生百年時代の歩き方」という本を見つけました。ここではその本の内容を紹介し、私の思いも触れたいと思います。

五木さんは、1932年生まれて、朝鮮半島で幼少期を過ごされ、引き揚げ後、ルポライターなどを経て、作家として活動をしてこられました。さきほどの本の中で次のように触れておられます。「私たちは、誰もが百歳以上生きるかもしれない時代を生きている。ならば、新しい生き方に切り替えてみてはどうだろうか。人生の目的は、生き抜くことです。どんなに辛い人生であっても、20代でなくなったとしても、20代まで生きたということに値打ちがあると私は考えるのです。仏陀は、思い通りに設計できないことを苦と表現したのです。死は思うに任せないものです。・・・人生百年時代は、長い人生をどう生きるかと同時に、自分はどう逝きたいかを一人一人が真剣に考え、まわりにも伝えておかなければならない時代と言えるでしょう」

さらに次のようにも述べておられます。「古代インドに四住期という考え方があります。学生期(がくしょうき)は、世間から学ぶ義務が課せられている時期。次の家住期(かじゅうき)は、世の中に出て生計を立て、社会的に活動する時期。その次が林住期(りんじゅうき)で、それを迎えた人は社会生活から身を引き、いろいろなを考えたり、瞑想したり生きがいを探す時期。そして、人生最後の遊行期(ゆぎょうき)に至る。俗を離れ、ゆったりと過ごす人生

の最終段階です。インドの人々にとっては、ガンジス川は聖なる川。その畔で死期を迎え、遺灰をその流れに委ねることは人生の究極の夢とされています」と。

私ごとですが、振り返ってみると、20代から60代半ばまでの家住期を四苦八苦して乗越え、定年後は琵琶湖や近隣の和歌山・四国など大きな川を、景観を楽しみながらカヤックで漕ぎ下る遊びに興じていました。そして、それも飽きてきた頃、大阪のシニア自然大学校で環境問題に関心を持つようになり、この会の活動に参加して里山の保全の活動にのめり込み、活動の楽しさを満喫し、沢山の方とも知り合いになり、十数年経ちました。これが、五木さんの言われる林住期だったかと思えます。さて、遊行期は余計なものを捨て、軽やかにいきたいと考えていたところ、たまたまNHK「新日本紀行」の番組で東京都の唯一の村の檜原村のことが取り上げられているのを見ました。この檜原村は、林業中心の山村で、高齢者ばかりの過疎の山村になっていました。そんななかで、この村に住んでこられたある方が、この村を活気ある地域に変えようということで、「紅葉の会」を立ち上げられ、村の人たちに呼びかけて、紅葉の苗の植樹をはじめられたそうです。そして、村にこられた人たちが宿泊できるシェアハウスができて



間もなくして、一人の若者が活動の趣旨に賛同して住み

着いてくれ、村の再生活動に希望が見えてきたとのことでした。

私はこの番組を見て、私のこれからの生き方を示すヒントが足下にあったことに気づきました。“そうだ、私のこれからは、このならやまの里山の整備を続けることだ。そして、将来、頃合いの年になったら、頃合いのいい日にこのならやまに来て、つれづれなるままに感慨にふけりたいな”と。